

実践発表 2

「地域文化の振興と体験活動の開発」

発表者 株式会社オハヨーサン

代表取締役社長 金森 英樹

私どもが修学旅行を受け入れているホテルは、岐阜県の荘川村です。その地で私は27年前からこの仕事をさせてもらっています。開設当時は名所・旧跡の見学が主の修学旅行が全盛でした。そのような状況の中、営業に行った先で、入社して若い営業の方が体験学習という耳慣れない言葉でしたが、そういったものをやりたいが協力してくれないかということをお願い、ぜひお願いしたいと同意しました。体験学習のはしりだったように思います。

ポイントトレッキングとか、魚のつかみ取りとか、乗鞍の残雪でのそり遊びとか、そういった体験学習からスタートしました。そんな簡単な体験学習でしたがそれを始めた所、生徒がどっと来ました。大阪方面の中学校は5月、6月がそのシーズンですが、もうそのシーズンは1日も空きがないぐらいでした。

それからしばらくたって、高校生のスキーも爆発的に増えてきました。それからは、春は中学生の体験学習、夏は体験学習とか学習合宿、冬はスキー体験学習と、たくさんの学生の受け入れをさせていただいてまいりました。

そんな中で新たな体験学習の開発とか料理メニューの開発をさせてもらっております。これから27年間で私が経験させていただいたことを、お話しをさせていただこうと思います。

体験学習については、学校や旅行会社からいろんなアドバイスとか要望をいただきまして、体験プログラムといったものを地元のインストラクターの人たちとつくっていきました。ただ、そういった思い入れが私どもの独りよがりになることを、当然避けなければなりません。体験内容によっては、生徒さんの評価、感想というのがその賛否を分けるところでございます。

私のところは、名所、旧跡の観光旅行とは本当に最初から無縁のところ、体験学習しかなかったこと、その体験学習を取り入れたり開発する機会に恵まれたということは本当に有難いことでした。

そういった自然環境の中で今痛切に感じているのは、台風や水害など地球環境の変化でものすごいことになるんだということです。我々は自然の中で生まれ生かさせてもらっているわけで、その中で地球環境を守ろうということの重要性は大変実感することです。

そういう中で今、私ども独自で開発しようということでやっているものに森の手入れというのがあります。これは植樹ということだけでなく、樹木を伐採をして森の手入れをすることです。森が地球にとってはとっても大切なことをまず生徒さんや学校さんに実感していただくプ

ログラムです。20年後、30年後の森はどうなっていくのかということを考えてもらいたいわけですね。森というのは再生可能資源であり、それをはぐくむために間伐とか枝打ちとか、そういった手入れを必要としているわけですね。その間伐したもので薪をつくったり、炭をつくったり、いろんな木材の工作物をつくったり、そういった有効活用をすることが、環境型社会づくりに向けてのヒントになるんじゃないかということをお話したいとインストラクターとやっています。

広大な敷地の中で、ものすごい大木がすごい音でドーンと倒れるのを見て中学生が驚きます。地元の森の手入れの人たちの手によって、1センチの狂いもなく安全な方向にピシッと倒れます。それを手際よく処理し、それで炭を焼いたり、次の日のフレームづくりなどに利用していくんです。生き生きと森の中にヘルメットをかぶって、鋸とか鎌を持って入って森の手入れをしていく体験は本当に素晴らしいと感じます。

あと私どもシャワークライミングと言いまして、実際に渓流に行って膝ぐらまで入って、長靴とか雨具をつけて、ヘルメットをかぶって歩いて行く体験です。それはもうふだん見る景色とは全然違った景色が、川をどんどん上っていくと見られるんです。一枚岩が滝になっていて、そこをロープ使わないと上れないところもあります。山もどんどん入ってきますと、四つ足の動物と魚という明確な分類じゃなくて、水が少なくなってくると魚にもやっぱり足が4つ生えていものもいたりして、今まで見たことのない角度から自然を見る、また自分の体でチャレンジして体感していただける、そういった驚きと感動をもってもらえます。

そのような開発を大変な思いでやらせてもらっています。

ある時、本を見ていましたら、今どきの子どもは魚が食卓に出てくる切り身のまま海を泳いでいると書いてあって、大げさだ、書き過ぎだなと思っていたんです。けれども、私のホテルに夏、家族連れのお客様がお見えになった時のことですが、お父さんと息子さんが部屋に入ってから、すぐ虫かごと網を持ってきて、「クワガタの宝庫と書いてあるが、クワガタがどこにあるんだ」とおっしゃるんですね。この魚の切り身とそんなに変わらないなと思いました。

そのお父さんは、クワガタが群をなしてブンブン飛んでいるというふうに想像されていたのですね。自然というのはほとんどの動物が活動するときというのは自分の身を守るために夜が多いんです。虫もつかまりたくないものですから隠れています。そういった自然を知らないお父さんの背中というのは、やっぱりとても小さく見えてしまうわけですね。インストラクターといつもこれらのことを話しながら開発をしていくわけですね。

体験学習というのは、自然体験、それとか産業体験ですね。産業体験というのは、農業とか林業とか水産業、それとかスポーツ体験などいろいろありますが、事前事後の学習をきちんと

やるのが、効果的になると考えます。例えば、私どもでも田植えもやりますが、事前学習がないと、ただの泥んこ遊びになっちゃうんですね。

私どもの莊川というのは、大変おいしいソバができるところです。蒔くだけで昼と夜の寒暖の差が非常に激しいところで非常においしいおソバができます。その畑は余り肥えていなくて、やせているくらいの方がうまいものができるといったことを学習していきますと、ただ蒔くだけの作業でも、やはり非常にインパクトは強いでしょう。

それから、事後学習として学校に行って、皆さんに手打ちソバを作るところを見ていただき、出来たソバを召し上がってもらいます。そして近くのおそば屋さんよりおいしいというのがわかると、体験学習の意義がぐっと上がると思います。やっぱり事前学習とか事後学習をしないと、体験学習のインパクトは弱いと感じます。

またラフティングが今、非常にはやっていますが、ラフティングというのはゴムボートに10人ぐらいの生徒さんが乗っていただいて、川を下っていくんです。これはもともと遊園地のジェットコースターみたいなところがありまして、完結型でその場だけでも驚きや感動というのはあるかと思うんですが、そういったものでもやっぱり事前学習などをすると非常に効果が上がると思います。

こういうのはいいなと思ったことを2つほど紹介させてもらいたいと思います。

徳島の公立高校の校長先生、その方、今は亡くなっていますが、その方と出会ったときから今までずっと尊敬をいたしております。その校長先生は高校時代にヨットとゴルフとスキーを3年間で覚えさせるのだとっていました。ヨットは近くに大きい川があり、ゴルフも地元でゴルフ場と練習場があるのでそこでできるので、スキーは君のところで頼むよということでした。私が「何でスキーとヨットとゴルフをやられるのですか」とお聞きしたら、「君だって定年退職してからゴルフが何かないと人生つまらないだろう。四国の温かい地域の生徒には、雪を見たりスキーをやるという機会自体がそうないんだよ。」とおっしゃいました。

その方はスキーをやられないんですけれど、長靴をはいてリフトに乗って、私と一緒に生徒さんが乗られるリフト全部を下見されました。白銀の山々の雄大な景色が広がっているわけですよ。校長先生は、「徳島ではこういう景色がないから、これを生徒に見せたいんだ」とっていました。その学校さんが最初にスキーをされて、そのあと徳島の高校さんはかなりやられたんですね。その学校さん自体がリーディング高校だと思うんですけれども、その校長先生は本当に皆さんから大変に慕われていました。

私はいろんな体験学習というものを拝見して、スキーの体験学習というのは素晴らしいなと思います。なぜかと申しますと、きょうのテーマのすべてが入っているんです。新たな自己の

発見ということが、スキーですと感ずます。挑戦と失敗を繰り返しながら、自己との葛藤ということがスキーにはございます。それから、挑戦する勇氣を持ったものが屈伏できる自己の恐れというのがあります。また、それを屈伏したときの楽しさ、そういったことは生きる力ということにも似た感動でもあると思うんです。スキーというのは、まだまだ過去のものにするには惜しいと私は感ずます。スキーの中には今日のテーマのようなものが生かされ、とてもいいものを持っているなと思います。2～3日で、ゼロから滑れるようになる、そういうプロセスが踏めるということで、本当に生徒さん自身が自己を発見する場であると実感いたします。

生徒の感想文の中で、修学旅行よりもスキー研修のことを書いている生徒さんが多いという話も先生方から聞きます。

それからもう1つ、私どもは2つのホテルを営業させてもらっておりまして、1つは普通のホテル、もう1つはコテージタイプの全室スイートルームです。

名古屋の旭丘小学校さんがそのスイートルームの方をもう8年ぐらい続けて利用していただいています、子供たちが大変ニコニコして生き生きしているんです。

それで私は校長先生に、なぜスイートルーム使われるんですかとお聞きしましたところ、子どもたちは先輩たちからの申し送りでスイートルームに泊まれるのをすごく楽しみにしているということです。私はスイートルームではもったいないじゃないかと思ったんです。校長先生がおっしゃるには、環境は人を変えることができる。「環境は人をつくる」といわれるように、スラムに住めば、その環境に染まることもある。それからその環境に置かれたときに、人は努力する。人は経験を通して、自分自身を変えていく、ということもおっしゃってありました。

それから、京都・奈良は社会科で学んだことを再確認できる場所としてはっきりしていますが、莊川のコースでは教科にあてはめることは無理。でも、子どもたちが自由にいろいろなテーマを持ち、友だち同士と自己の発見ができる楽しいコース、生徒たちにとってとてもいいコースなので校長先生は、「在任中は変えるつもりはありません」と言ってくださいました。

それから寝食をともにするというので、1年間一緒にいても全く理解できなかった人が、たった一晩で、こいつはこういうやつだったのか・ああ、こんなふうだったんだというふうに垣根が見事になくなるということが、私にとってもありました。

また同じ釜の飯を食うという言葉もありますが、特に食事については心配りをします。冷めた料理とかまずい料理は出さないようにします。まずい料理というのは、いつまでも悪い意味で覚えているものです。昔行った修学旅行で、友だちと寝食をともにしたということはよく覚えております。300名、400名という方に温かいものを全部温かく出すというのは結構大変なことで、私ども、料理のこともホームページのご案内で載っておりますが、食器類も全部

温かくして出すようにしています。

それと私はと思いますが、部屋というのはツインじゃなくて、6人ぐらいが入るという形が、生徒さんはいろんな意味で思い出多いんじゃないかなと考えます。

最後に、料金的な問題がございます。とかく我々日本人は料金というのは、第二次産業の発想で考えてしまうんですね。例えば5個より10個、10個より100個の方が安くできるだろうと、機械でもものをつくる時というのは確かにそうなんですけれども、サービス業というのは全く逆でございます。

またバイキングでは全員がそろそろまで待つのではなく、自由に食べていただく。学校側として連絡手段とか時間とかいろいろあると思いますが、ちょっと角度を変えていただきますと、選択の間口はもっともっと広がるんじゃないかと思います。また修学旅行を受け入れができるホテルというのは限られていると思います。角度を変えますと、もっと間口が広がって、価格帯も広がるんじゃないかと思います。以上私が27年間ずっとこの仕事に携わらせていただく機会を得てそこで感じたことをお話しさせていただきました。